

40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	◆水明インターネット句会◆ 令和八年三月
少年のごとき師のをり花の寺	儂くも散りゆく桜潔よし	屋根すべる音で目覚むる春の雪	ぬるぬると目覚むる欠伸春うらら	子ら飛び出せり卒園のチューリップ手に	卒業やまだ見ぬ地図を胸に抱き	可憐なる花に佳き名を犬ふぐり	この河は通してくれと蝌蚪の群	琴の音の裏路地歩くだけの春	初めてのおめかし濃いめ雛祭り	それきりで黙す春雷箸止まる	湾岸をクレールン掠め鳥帰る	春眠やあと十分を何度でも	網掛けの毛糸形になれぬまま	背負ふ子のまだ泣き止まず雪催	啓蟄や水脈の音して畦弛む	土筆とつてきて怒られて爺と孫	雛祭り遠き娘の写真かな	春月や乗りたき船に宇宙船	いい人と言はれて春の風になる	

80	79	78	77	76	75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61	◆水明インターネット句会◆ 令和八年三月
春小雨小心者の小さい字	猫柳背中姿の首を撫で	コーヒーの冷めて名残りの雪の朝	かがむ子の指つんつんとももの芽へ	知る庭に知らぬ鞆ある母校	開きかけたシャッター閉まる春一番	甘茶仏子供あふるる村の寺	卒業や首席の彼の丸メガネ	噛み合はぬ会話の増えて春炬燵	梅咲くや風に流るる笑ひ声	春林のけむりのごとき朝の径	編みおろしにつまみの花よ卒業歌	鼻垂れて語る哲学春の月	啓蟄や膨らんでゐる地平線	花種を五袋混ぜて庭に立つ	あまたの別れ三月の海は黙（もだ）	皆既月食見たことにする菜種梅雨	ヨチヨチのファーストシューズは桜色	堰躍る小鮎の綱びかりかな	七色の雨や木の芽に触れてより	

